

野鳥会報

No.77 2014年 3月発行

日本野鳥の会新潟県

鳥のいる風景 ヤマセミ *Megaceryle lugubris* カワセミ科



水音がひびく山地の雪景色にヤマセミはよく似合う。しかし冬景色を観るわたしたちの想いとは異なり、溪流魚を捕食して生きるヤマセミには厳寒の狩りは困難が多い。冬季は冷水温のため魚の活動は鈍く数は少ない。特徴あるヤマセミの羽模様は、冬季の危険な捕食行動を支える保護色になっている。

世界的にみて、その分布はアジア東岸域と日本列島に限られている。ヤマセミが雪国に何故多いのか、羽模様が何故このような配色なのかは、起源と進化による。ヤマセミなどカワセミ科の祖先は、4000～5000万年前の東南アジアやオーストラリア北部に生息したショウビン類と言われている。その中で河川の魚に特化したグループがカ

ワセミ類へと進化し、ユーラシア大陸の氷結しない淡水河川に分布域を広げた。500万年～1000万年前にユーラシア大陸北西端に達した一部がベーリング海を越え、新大陸でヤマセミの祖先・アメリカヤマセミへと進化した。南アメリカではミドリヤマセミが出現し、200～500万年前には大西洋を渡りアフリカ大陸に達した。ヒメヤマセミから100万年ほど前にオオヤマセミが分化し、もう一方は中央アジア、ヒマラヤ山麓を越えアジア東岸に達した。5000万年の時を経て進化は地球を一周し日本にヤマセミが出現した。ヤマセミは落葉広葉樹が生育する山地溪流が生息地なのである。

(石部 久)

新潟市海岸林で繁殖するアオジはどのような環境を利用するのか？

出口 翔大（新潟大学自然科学研究科 修士2年）

はじめに

アオジはその生息環境と美しいさえずりから「高原のテノール」と表現されることもある。その名のとおり、アオジの本州における繁殖環境は、標高700mから1600mの灌木林、草原、カラマツの疎林、クマザサのやぶであるとされている。しかし新潟県においては海岸林や平野部の河川敷で繁殖が確認されている。新潟市西海岸公園の海岸クロマツ林は、1980年代以降、整備作業などの遅れにより植栽されたクロマツの純林から主に林床に広葉樹が生育する混広林へと林の様子が変化してきた。アオジは当地において1996年ごろから繁殖が確認されており、詳細が不明な本種の環境利用を調べるのに良い機会となっている。そこで、本研究では管理状態の違いを反映して林床の様子が対照的な2つの林で生態調査を行い、結果の比較を通して本種の環境利用を明らかにすることを試みた。

方法

調査地：新潟市中央区西海岸公園の海岸クロマツ林内に設けた2つの調査区（金衛地区7.0ha：管理が低頻度で低木が密生、西船見地区6.8ha：管理が高頻度で低木は少数）。調査は2012年と2013年に行い、以下の内容を調べた。①テリトリマッピング法によるなわばり数の推定、②巣の探索、③林内の階層構造（*1）と植被率（*2）、④ソングポストの位置（高さ、利用樹種）。

(*1)高木層（高さ12m以上）、亜高木層（同12~4m）、低木層Ⅰ（同4~1.3m）、低木層Ⅱ（同1.3m未満）、草本層の5層。
(*2)一定面積内において植物（幹や枝葉など）が覆っている割合を示した数値。

結果

推定なわばり数とその密度：金衛地区でそれぞ

表1. 両調査地区におけるなわばり数と密度、巣数の比較

	なわばり数	なわばり密度/10ha	巣数
金衛(7.0ha)	5	7.1	6
西船見(6.8ha)	1	1.4	0



図1. 本調査地で発見されたアオジの巣

れ5個、7.1個/10haで、西船見地区での結果（1個、1.4個/10ha）よりも明らかに値が大きかった（表1）。

発見された巣数：金衛地区の6個に対し、西船見地区では0個であった（表1）。巣は6個中4巣が樹上に、残り2巣が地上にあった。巣の高さは地上から50cm～195cmの範囲にあり、そのすべてが低木性の常緑広葉樹（アオキ、マサキ、ネズミモチ）に造られていた。地上で発見された巣の1つはクロマツの根元に造られていたが、もう1つは周辺木から落下した可能性が高かった。植被率：金衛地区と西船見地区における階層別の平均植被率は、低木層Ⅰで特筆すべき違いがみられた（図2）。金衛地区では低木層Ⅰが53.8%であったのに対し、西船見地区では低木層Ⅰが0%

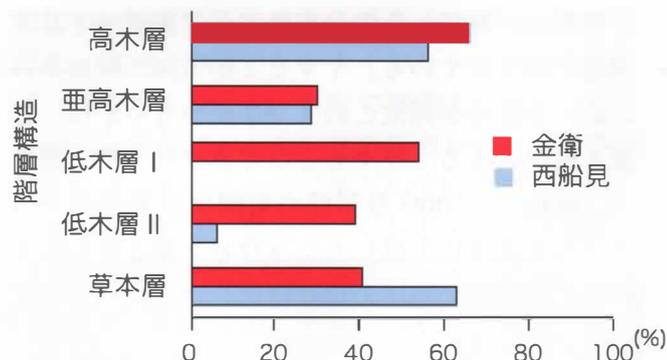


図2. 両調査地区における階層別の平均植被率の比較

であった。また、金衛地区では、亜高木層の平均植被率が他の階層のものに比べ低かった。

ソングポストの位置：観察したソングポスト73例中、電線を利用した1例以外は全て樹上を利用していた。ソングポストの平均地上高は6.8m (2.5m～11.0m) であった。また、利用される割合の高かった樹種は、5月ではクロマツ (全体の48.9%)、ニセアカシア (23.4%)、エノキ (21.3%) の順であったが、6月ではクロマツ (69.2%)、エノキ (23.1%)、ニセアカシア (7.7%) の順に変化した (図3)。

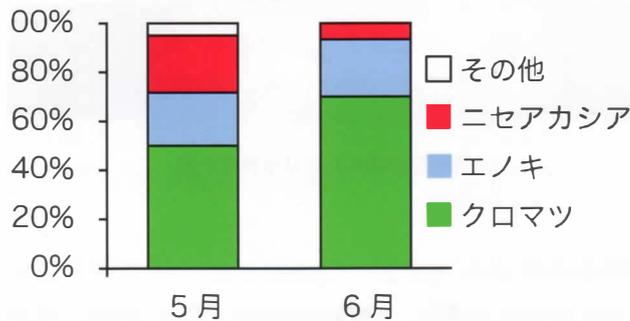


図3. ソングポスト利用樹種の季節変化

考察

なわばり数が多く、密度も高かった金衛地区は、生息数から見て、西船見地区よりも繁殖期のアオジにとって好ましい環境であると判断される。植被率調査の結果、西船見地区よりも金衛地区の方が低木層Ⅰの植被率が高かった。他地域の先行研究において、本種はやぶの多い環境に生息していると報告されており、繁殖期のアオジに選好され



図4. アオジ雄



図5. アオジ雌

る林は、海岸クロマツ林においても低木の密生した林分であると言える。この理由の一つに、本種の営巣環境がやぶの中であるという点が考えられる。本研究においても低木性の常緑広葉樹上で複数の巣を発見した。本調査地においても低木性の常緑広葉樹が密生しており、落葉広葉樹の展葉前から樹上に営巣することが可能である。そのため多くの巣が低木性の常緑広葉樹上で確認されたものと推察される。

ソングポストの平均高 (6.8m) は本調査地の林の階層構造において、比較的植被率の低い亜高木層と一致する。また、利用樹種に関しては、5月、6月ともにクロマツが最も利用されたが、6月ではニセアカシアの利用割合は減少した。このことはニセアカシアの展葉が同地に生育する樹木に比べ遅いことと関係しているように思われる。ソングポストは視覚的なアピールの場としても機能し、また密な植生はさえずりの届く距離をかなり短くすることが知られている。これらのことからソングポストの周辺には一定の空間が必要であると考えられる。

まとめと今後の課題

海岸林で繁殖するアオジに必要な環境は第一に営巣場所となるやぶであり、第二にやぶの上部に一定の空間が存在することであると考えられる。しかし今回の調査だけでは不十分であり、今後は競争相手や捕食者の存在およびエサ資源など他の諸要因も考慮して調べる必要がある。

鳥屋野潟に生息するトラフズクのペリット分析

新潟市 佐藤 悠子

はじめに

トラフズクは主に北海道と本州北部で繁殖し、本州中部以南で越冬する鳥であるが、新潟県では留鳥となっている。新潟市中央区に位置する鳥屋野潟の周辺には一年を通してトラフズクが生息している(図1)。2005年から毎年繁殖が確認され、冬季には集団ねぐらを形成している。2014年2月には最大で7羽を確認した。

トラフズクの食性は主にハタネズミ・ハツカネズミ等のネズミ類であることが知られている。新潟県内では新潟市味方および西川(Chiba et al. 2005)、長岡市(岩本 2009・2010・2011)においてペリット分析による調査が行われているが、鳥屋野潟ではこれまでに調査が行われていない。

そこで鳥屋野潟におけるトラフズクの食性を明らかにすることを目的に、2012年、2013年に回収したペリットについて分析を行った。今回は得られた結果の中から餌生物の種、個体数とその割合について報告する。



図1. ねぐらで休むトラフズク

調査地と調査方法

鳥屋野潟公園女池地区内のトラフズクのねぐら周辺を調査地とした。

2012年1月から4月と2013年4月から11



図2. 回収したペリットの一例

月にペリット(図2)を回収した。ペリットは水で湿らせて分解し、得られた骨を用いて種の同定を行い、主に頭骨の数から個体数の推定を行った。

結果

本調査では180個のペリットから361個体の餌生物が得られた。餌生物の種は10目20科26種(哺乳類3目3科7種、鳥類3目11科13種、昆虫類4目6科6種)であった(表1)。

得られた餌生物の個体数に占める割合は、哺乳類が83.7%(302個体)と大半を占めており、鳥類は11.0%(40個体)、昆虫類は5.3%(19個体)と低かった。種別ではハタネズミ(図3)



図3. ペリット中に発見されたハタネズミ頭骨



図 4. タシギの骨格（上から上嘴先端、上腕骨および手根中手骨）

の 30.2% が最大であり、次いでイエコウモリ 20.2%、ハツカネズミ 16.3% と哺乳類が上位 3 種を占めた。この他に 10% を超える餌生物種はなかった。

餌生物の中で、ハタネズミとハツカネズミは調査期間を通して得られた。鳥類は割合としては低かったが、種類は多かった。その中にはタシギ(図 4) やオナガ等中型の種も含まれていた。昆虫類はアブラゼミやオオコフキコガネ、比較的大型のバッタ類などで、小型の昆虫は検出されなかった。得られた哺乳類を主な生息環境の違いから、野原や農耕地など人間の生活域以外に生息する「野ネズミ (ハタネズミ・アカネズミ・ジネズミ)」、人間の生活域に生息する「家ネズミ (ハツカネズミ・クマネズミ・ドブネズミ)」、両地の上空を飛翔する「コウモリ (イエコウモリ)」と分け、その割合を比較すると、それぞれの環境に生息する種を大きな偏りなく利用していた (図 5)。

考察

得られた餌生物は主に小型哺乳類であり、最も利用する種がハタネズミであったことは県内における報告と同様の結果であった。全体で見ると、鳥屋野潟に生息するトラフズクの食性は他地域と類似していたが、内訳においては異なる点が見られた。

まず、種類が非常に多いことである。他地域における最大種数は全体で 14 種、哺乳類 6 種、鳥類 8 種、昆虫類 3 種であり、すべての分類において鳥屋野潟が上回っていた。次に、割合の分散である。他地域では利用割合の高い 1 種または 2

種で全体の 70% 以上を占めることがほとんどであるが、鳥屋野潟では上位 3 種の合計でも 70% に満たず、特定の種に偏っていないといえた。

その理由として、鳥屋野潟の周辺に農耕地、水辺、住宅街等様々な環境が隣接しているため、それぞれの環境に生息する多様な種を餌として利用できることが考えられる。哺乳類の生息環境別に分けた場合で大きな偏りが出なかったことからトラフズクは様々な環境で採餌していると考えられる。

餌生物の中でハタネズミとハツカネズミは期間を通して得られたため、年間を通して鳥屋野潟周辺に生息していると思われる。個体数の少なかった種については生息数が少ないことや、夜行性のトラフズクとは活動時間帯が異なり遭遇しにくい等が考えられるが、野外における餌生物に関する調査を行っていないため不明である。

今後はペリット調査を継続するとともに、環境や餌生物に関しての調査も行い、他地域との結果に違いが生じた理由を探っていきたい。



鳥屋野潟公園の生息環境

参考文献

- ・ Chiba A, Onojima M, Kinoshita T (2005) Prey of the Long-eared Owl *Asio otus* in the suburbs of Niigata City, Central Japan, as revealed by pellet analysis. *Ornithol Sci* 4:169-172.
- ・ 岩本二郎 2009 長岡市立科学博物館研究報告第 44 号: 27-36.
- ・ 岩本二郎 2010 長岡市立科学博物館研究報告第 45 号: 13-18.
- ・ 岩本二郎 2011 長岡市立科学博物館研究報告第 46 号: 29-38.

表 1. 餌生物の種、個体数と割合

	目	科	種	個体数	%			
哺乳類	トガリネズミ目	トガリネズミ科	ホンシュウジネズミ	6	1.7			
	翼手目	ヒナコウモリ科	イエコウモリ	73	20.2			
	齧歯目			ハタネズミ	109	30.2		
				ホンドアカネズミ	1	0.3		
				ハツカネズミ	59	16.3		
				クマネズミ	10	2.8		
				ドブネズミ	13	3.6		
				クマネズミ属 spp.	9	2.5		
				不明	不明	不明	20	5.5
	不明	不明	不明	2	0.6			
				計 7種	302	83.7		
	鳥類	チドリ目	シギ科	タシギ	1	0.3		
		ブッポウソウ目	カワセミ科	カワセミ	2	0.6		
スズメ目				オナガ	1	0.3		
				シジュウカラ科	シジュウカラ	2	0.6	
				ツバメ科	ツバメ	3	0.8	
				ウグイス科	ウグイス	3	0.8	
				メジロ科	メジロ	1	0.3	
				ムクドリ科	ムクドリ	5	1.4	
				スズメ科	スズメ	3	0.8	
				アトリ科	カワラヒワ	3	0.8	
					シメ	2	0.6	
					ホオジロ科	アオジ	3	0.8
						オオジュリン	7	1.9
					不明	不明	4	1.1
							計 13種	40
昆虫類	直翅目	コオロギ科	エンマコオロギ	4	1.1			
		キリギリス科またはツユムシ科	不明	2	0.6			
		バッタ科	不明	1	0.3			
	半翅目	セミ科	アブラゼミ	3	0.8			
	甲虫目	コガネムシ科	オオコフキコガネ	3	0.8			
	鱗翅目	不明	不明	1	0.3			
	不明	不明	不明	5	1.4			
				計 6種	19	5.3		
			全体計 26種	361	100.0			

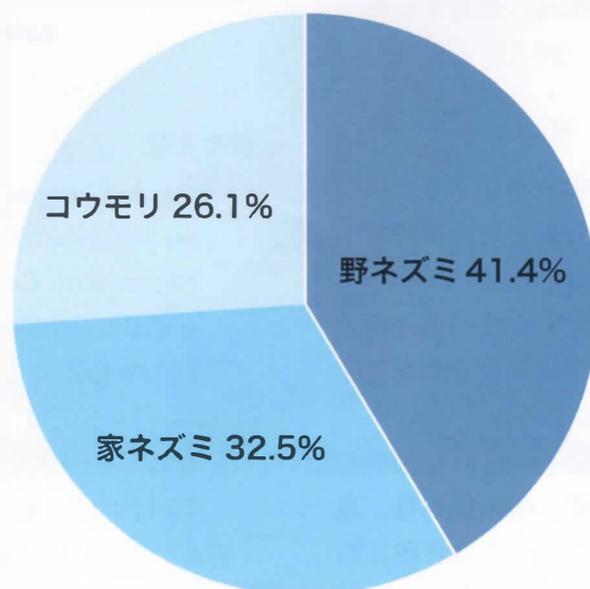


図 5. 生息環境別哺乳類の割合

ヘラサギって面白い！

新潟市 小川 龍 司

ヘラサギはそのユニークな嘴から名前がついている。「ヘラ」と言われたら多くの人が平べったい印象を思い浮かべることと思う。興味深いことに学名と英名のいずれにおいても、その嘴に注目した名がつけられている。学名 *Platalea leucorodia* は、「platalea：皿、平たい等の意（≡plate）Leucorodia：サギ」となり、平たい（嘴の）サギという意味の名前となる。英名 Eurasian Spoonbill は、「Eurasian：ユーラシアの Spoonbill：スプーン・さじの嘴」となり、ユーラシアに生息するスプーン様の嘴の鳥という名前になる。

彼らはこの平たい嘴を使い餌生物を捕食している。図鑑では、「小魚や両生類、貝類、昆虫類等を食物とする。植物質では、ミクリの果球やおモダカの皮等を食べる。」と記述されている。採食行動を観察していると、嘴を水中に入れ左右に振りながら歩き回り、何かを捕えては飲み込んでいく様子がよく見られる。新潟市の佐潟では、嘴からヒレがはみでるほど大きな魚や大きなハサミを持つザリガニ、また植物の茎を食べる様子も観察されている。何かを捕えると必ずといってよい程飲み込む行動が見られることから、ヘラサギとしては「フナが食べたい、コイが食べたい」といったことは考えず、嘴に当たり次第に獲物を食べていることと思われる。

採食行動から、ヘラサギは主に脚の届く程度の浅瀬で過ごしていることがわかる。文献によるとヘラサギの跗蹠（ふしよ）は長くとも 150mm 前後しかなく、踵（かかと）から脚の付け根までの長さを含めても水深が 20～30cm 以下でないと腹や胸が水に浸かってしまうことが想像される。興味深い事例として、2012 年度と 2013 年度において佐潟で越冬した個体は、いずれも 3 月上旬～中旬になると飛去している。佐潟では 3 月から水位が上昇するように水門が管理されており、終認となる頃には水門量水計における測定値が 457(mm) 程度となっていた。（佐潟水鳥・湿地センター調べ）ちなみにこれは 2004 年度に佐潟初

記録となった個体についても同様であった。この 457 という値の時に主に利用していた水辺の水深がどの程度になるか測定をしていないが、この頃に観察していると採食時に腹が水面に当たる程深くなっていたことから、採食限界水位に近いのではないかと私は推測する。もちろん、日本へは越冬のため飛来しているのも春先に飛去するのは当然のことだが、福島潟においては 4 月まで滞在していたことから、この採食条件と飛去の関係については様々な考察をすることができそうである。

近年新潟市に飛来した個体の中には初列風切羽の先端に黒斑が見られ、また嘴の先が肉色といった若い個体の特徴をもつものがいた。幼鳥では嘴全体が肉色をし、初列風切羽に黒斑があるとされる。今季観察された個体は嘴の半分以上が黒く、先端のみに色がついていたことから第一回冬羽（幼鳥）ではなく第二回冬羽以降（若鳥）にあたる個体であると考えられる。このように幼鳥か否かは嘴で推測できるが、若鳥か成鳥かについては嘴の色や波状の隆起、冠羽、風切羽の黒斑の有無等からを総合的に判断しなくてはならず、資料が不足している。きたる「三年目の飛来」に期待しながら、ヘラサギに関する調査を続けたいと思う。



新潟市鳥屋野潟に飛来したヘラサギ（2013年11月8日）

シジュウカラガン 297 羽の群れが阿賀野川に飛来

新潟市 田村智恵子

2014年2月14日、阿賀野川でシジュウカラガンの群れを確認したので報告します。

午前6時半頃、大阿賀橋（新潟市）上流側の中洲でねぐらをとる256羽のシジュウカラガンの群れを発見しました。この時、周囲に見られたのはコハクチョウのみで他のガン類はおらず、シ

ジュウカラガン単独の群れであると考えられました。その後、7時半過ぎに41羽が飛来し群れに加わり、合計297羽が同時に確認できました。

阿賀野川でシジュウカラガンを観察した旨を同日の夜明けから調査している新潟県水鳥湖沼ネットワークの各湖沼（瓢湖、福島潟、鳥屋野潟、佐潟）



阿賀野川河川敷の堤内地に降りたシジュウカラガンの大群



合流した41羽の群れ



かつては標識用足輪を付けた個体が多かった
(2011年2月4日角田山麓水田にて)



ハクガン、マガン、オオヒシクイの群れ
(2013年2月3日 頸城平野水田 撮影 岡田成弘)

担当者へ連絡したところ、福島潟でも潟からの飛び立ちが確認されており、7時15分前後に2群れ計64羽であったとのことでした。阿賀野川へ7時半過ぎに飛来した41羽は福島潟から飛来した可能性が考えられるため差し引くとしても、この日320羽が新潟に滞在していたこととなります。

阿賀野川の中洲にいた群れは、その後漁の舟が出たため飛び立ち、堤内地の畑へ降り立ちました。行動を観察するとはじめは座り込んで休息する個体が多かったものの、しばらくするとちょこちょこせわしなく動き回り始めました。畑には積雪があり一面真っ白でしたが、わずかに出ていた白菜の頭をついばむ様子も見られました。

観察中は終始シジュウカラガンのみの単独の群れで行動していました。つい数年前まではオオヒシクイの群れに紛れるように行動していた記憶がありますが、その頃と比べるとずいぶんと数も増え自立したものだとうれしく感じました。

◆シジュウカラガン羽数回復計画

シジュウカラガンはかつては日本に多数飛来していた記録があります。しかし繁殖地であるアリューシャンや千島の島々における毛皮採取目的のキツネの放獣や、越冬・中継地での狩猟圧の増加により個体数は激減し、一時は絶滅したとされていました。

1963年、生き残っていた小群が発見されたところから羽数回復計画が始まりました。米国の回復チームの手により個体数は回復し、絶滅の危機を脱し、1983年にはアジアでの羽数回復計画も実行に移され、その後日ロ米による共同事業も始まりました。

この事業では、これまでに500羽を超えるシジュウカラガンが標識を装着され繁殖地の島で放鳥されました。日本に渡ってくる個体数も徐々に増え、特にここ1～2年は増加率もぐっと上昇し、今年は600羽を超えるまでになりました。新潟にも毎年飛来し、標識を付けた個体も緑のD99をはじめ毎年観察されていました。

◆今後への期待

このようにシジュウカラガンは羽数回復計画により順調に日本に飛来する数が増えています。近年では脚環を付けた個体はほとんど見られませんが、放鳥された個体が、子をつれ、その子がまた子をつれて、毎年仲間を増やして日本に渡ってきてくれているのですね。

シジュウカラガンと同様に羽数回復計画の進められているハクガンは、シジュウカラガンに遅れること数年、2012年～2013年シーズンから個体数の回復が軌道に乗り始めた兆しが見られているようです。同シーズン100羽に迫った飛来数が今シーズン、ついにその大台を超えたのです。否が応でも期待が高まります。シジュウカラガンに続き、ハクガンの大きな群れに越後平野で出会うことを楽しみにしたいと思います。

<参考資料>

- ・シジュウカラガン羽数回復計画パンフレット
「COME BACK GEESE 仙台の空に、再び。」
仙台市八木山動物公園、日本雁を保護する会編
- ・仙台市八木山動物公園ホームページ(野生シジュウカラガンの羽数回復事業)
- ・雁の里親友の会(2012-2013)雁の友45-47.

厳冬の日本海を訪ねて

寺泊港・出雲崎港探鳥会

2014年2月2日



人を恐れないコクガン3羽



寺泊のウミウの群



出雲崎港のカモメの群



コクガンの姿はどことなく哀感が漂う



出雲崎港堤防から外海を見る



出雲崎海岸のウミネコ



寺泊水族館脇にて

2014年2月2日(日)

観察種：オオハム類 sp、ミミカイツブリ、アカエリカイツブリ、ウミウ、ヒメウ、アオサギ、コクガン、マガモ、カルガモ、ウミアイサ、トビ、ハマシギ、セグロカモメ、オオセグロカモメ、ウミネコ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、ヒヨドリ、イソヒヨドリ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス。

以上23種+ sp1種。



鳥は雁でも鴨でも鴨千鳥でも、いかに群飛しても絶対にもぶつかり合うことなく整然と飛ぶものだと思われているようですが、私は飛びながらぶつかったハマシギを写しました。画像の中央やや右手に6羽が団子になっていますが、どうもその団子の左端の1羽が向きを変えようと振り向いた時に後ろから来た数羽とぶつかったようです。皆慌てている様子がわかります。こんなところは実際でも写真でも見たことがなかったのでけっこうスクープ画像ではないかと思うのですがいかがでしょう？

飛びながらぶつかり合ったハマシギ (2013年12月2日 日和山海岸埋立地、高辻 洋)



嘴を開いたヘラサギ (2014年2月1日 佐潟、岡田成弘)



ホシムクドリの出現 (2014年1月31日 新潟市赤塚、高辻 洋)



日本野鳥の会新潟県ホームページ

ブログ形式のホームページです。
最初の Top ページのサイトに入るには、Yahoo のファイル-開く-から、
<http://wbsj-niigata.blog.ocn.ne.jp/main/>
と入力して OK をおしてください。
詳しくは、No.70 号の会報をお読み下さい。

新潟県探鳥地ガイド 雪国の鳥をたずねて

福島潟 国内最大のオオヒシクイの越冬地



春の福島潟

探鳥地の様子

福島潟は新潟市の東端から新発田市にかけて広がる潟湖である。日本海東北自動車道豊栄新潟東港インターから車で5分ほどで水の公園福島潟の情報発信施設・水の駅「ビュー福島潟」に到着する。ここでは潟中央カメラというライブカメラを遠隔操作して野鳥を観察でき、屋上からは福島潟を一望することができる（要入館料）。

県道を渡り園地に入ると、潟のそばまで菜の花畑やヨシ原などが広がり、水辺を20分も歩けば公園のはずれにある環境省の野鳥観察舎「雁晴れ舎」に着く。その手前にある「自然学習園の池」もポイントで、いくつもの池に希少な水生植物が移植されている。

園地南方の対岸に移動すると、ハス池のある遊潟広場やオニバス池などの見どころもある。手軽に水辺を観察できるのはこのあたりまでで、新発田市側はヨシ原や湿地が広がり湖畔まで容易に近づけない。現在潟を広げる河川改修工事が進行中で、公園を外れた場所では通行制限もしばしばあるので注意を要する。

鳥の観察

春分の頃行われるヨシ焼き後の焼け野原は見通しもよく、小鳥に人気の餌場となる。菜の花が育つにつれ、ホオアカ、ヒバリが目立つようになる。

初夏の象徴はオオヨシキリで、地元ではチョ

ゾと呼ばれ親しまれている。地元のおじいさんは潟で遊んだり卵を食べたりした実体験から、意外と野鳥のことを肌で知っているのも、機会があったらお話を聞いてみてほしい。

ハスの葉が広がる頃、公園内にもヨシゴイやカワセミが出入りし、パンの親子連れがハス池を走り回る。ミサゴも毎日のように決まった枝に姿を見せる。

9月から10月にはニューナイスズメの群によく出会う。かつて当地でスズメ焼きが名物だったという時代にはおびただしい数がいたと聞く。

冬、オオヒシクイ日本最大の越冬地を実感するには、やはり12月から1月の早朝に飛び立ちを見るのがお勧め。チュウヒやオジロワシなど猛禽類の種類が多い時期でもある。

初春から3月にかけてはタゲリの群が増えてきて数百羽の群舞に出会うこともある。



水の駅 ビュー福島潟

ビュー福島潟のライブカメラで野鳥にストレスを与えずに、時に決定的瞬間を観察できるのも福島潟のいいところ。カヌムリカイツブリやトビの営巣、警戒心の強いヒシクイがヒシを食べる姿のアップなども見られ、自分で操作するとテレビとは違った臨場感があり一見の価値がある。野外観察とうまく組みあわせて楽しんでいただきたい。

水の駅「ビュー福島潟」レンジャー 成海信之

発行 2014年3月31日 No.77

発行人 石部 久 編集者 小林成光、浦部良雄、千葉 晃

日本野鳥の会新潟県

事務局 〒950-0941 新潟市中央区女池3丁目13番25号

TEL 025-285-2405 本間由紀子方 〈振替口座〉00610-1-6002